

東北被災地訪問報告

2011年3月11日14時26分。東北三陸海岸沖で発生したM9.0の大地震とそれによって引き起こされた大津波、そして福島第一、第二原子力発電所事故と放射能汚染。その後も幾度となく繰り返される震度5前後の余震と見えない放射能の恐怖と闘いながら過ごした一年でした。テレビに映る映像や新聞、雑誌に踊る文字はいずれもセンセーショナルで見るたびに心が震え、政府の無策ぶりに東電の無責任ぶりに激怒し、そして自分自身の無力さふがいなさに地団駄を踏む日々でした。エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金の基本精神は「現地の人々のニーズに合った草の根の支援」でしたが、「現場」を知らずして何をかいわんや。「自分の目で見、感じ、考える」に、今回は「復興支援のためには現地で金を使う」もコンセプトに加え、東北被災地訪問を企画しました。

[DATA]

日程：2012年3月30日(金)～4月1日(日)

ルート：東京→盛岡→宮古→田老→宮古→山田→釜石→福島→東京

参加者：中島まり英、森 俊子、山下 史、千葉智恵子（敬称略）

「茫然自失した果て」に見えるものは……

～今回の訪問をきっかけに考えたこと～

山下 史

3月30日(金)

東京を早朝発ち、盛岡へ。盛岡から山田線で宮古へ。沿線の山は雪。宮古から一部復旧した三陸鉄道で田老へ。田老では、大阪から家族で来て今日は単独行動という女性と一緒に一時間ほど見学。10メートルの防潮堤まで歩く。行き合わせた地元のおじさんが道案内してくれました。田老だけで200人が死亡。行方不明者も多数。

あんな大津波とは思わず、津波を見に行きさらわれた人も多かったとのこと。防潮堤の内側は建物は一軒もなく、更地となり、まだ分別が終わっていない巨大な瓦礫の山が悪臭を放っていました。まり英さんからマスクを一枚もらって歩く。

三陸鉄道で再び宮古へ。宮古の町は、営業している店舗も多く、災害の跡をあまりとどめないほどに、きれいになっていました。再開された魚菜市场まで歩いて見学、買い物。高知のひろめ市場の人たちがきて交流したと聞き、少しうれしくなりました。

宮古から浄土ヶ浜へ。浄土ヶ浜は志願するボランティアが多く、真っ先に原形を回復したとタクシーの運転手さん。ただし遊歩道などは利用できる状態ではありません。この日は、浄土ヶ浜から6キロほど北にある「休暇村陸中宮古」泊。休暇村自体はずいぶん高いところにあるので被害はなかったようですが、被災した人を集団で受け入れ。営業再開した今もまだ警察関係者(?)を若干を受け入れているとのこと。

写真で見る東北訪問記



盛岡へ向かう新幹線の車窓から。向こうに見える山々はまだ冬の装い。



盛岡から宮古を走るJR山田線。この頃はまだ半ば観光気分だったが。(約0.07μSv)



JR宮古駅。ここで三陸鉄道北リアス線に乗り換え、田老町を目指す。屋根には「頑張ろう宮古」の横断幕。(約0.05μSv)



田老駅のホームから見た町の様子。瓦礫は撤去され、家の土台だけが残っていた。

3月31日(土)

早朝お散歩会のものち、宮古からバスで山田へ。「みちの駅やまだ」で買い物。また岩手県北バスに乗って、釜石へ。このルートの子窓からみる海岸線はただただ平ら。瓦礫の山と家の土台跡がのこる平らの地面。まれにかつて病院だった建物がスケルトンで残っていて、カーテンの切れ端が揺れていたたり・・・。

釜石は大雨。雨の中を歩いて、仮設店舗が集まっているところへ。地元ケーブルテレビで放映するというイベント(伝統の踊り)をやっていましたが、あいにくの大雨なので、観客も一握りで侘しさがいや増します。釜石は町中でも二階の中ほどまで水がきたとか。店舗もほとんど閉鎖状態。崩れかけた建物があちこちに。復興ということばは、はるかかなたに小さくポツンとあるようでした。

釜石から釜石線、新幹線をのりついで福島へ。7時ころ「野菜カフェはもる」着。(はもるは、汚染されていない西日本などの野菜や食品販売、健康によい料理講習会、交流会、原発・放射能関連の勉強会・情報センターなど多機能の場所と見受けました。これも佐藤さんが中心となり昨年11月立ち上げ)。メンバーの陶山さん手作りの夕食をいただく。

9時ころ佐藤幸子さんどこかのトラブルを解決してやっと来る。佐藤さんの活動や、福島の状況などお話しを聞く。なにしろスーパー・ウーマンとはこの人かというくらいの活動ぶりです。5人の子どものお母さん(ご本人と子どもの3人?は山形へ疎開中)、川俣町で自然農法のやまなみ農園経営・研修生受け入れ(3.11後、閉鎖。現在ご主人が岡山で土地を探しているとか)。「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」代表。「野菜カフェはもる」運営、NPO法人理事長でヘルパー派遣事業運営、ゲストハウス「象」運営、福島診療所建設委員会 (<http://www.clinic-fukushima.jp>) 中心メンバー、などなど。その他、知的障がい者、身体障がい者の組織の役員や会計も。肩書きだけで10ほどありそうでした。そのうえ、全国各地で講演。溜息がでるほどのパワーです。

中心はやはり「子ども福島」と見受けました。子どもを安全な場所で避難させるのは単にお金の問題だけではなく、多くの難問があるようでした。子どもたちが行きたがらない、コミュニティの維持などなど。避難も、週末だけ、夏休みなどさまざまな形で可能とのこと。提供できる場所があれば、自治体ではなく「子ども福島」と連絡をとりあったほうが活きると思いました。農業の再生については、福島大学の若手研究者グループが中心となり、土壌の汚染がどの程度農作物に吸収されるかを丹念に調査した結果、従来の想定(1%?)より相当低い(0.1%?)ことが判明。また同じ田圃でも場所によって、大きな差があることがわかったため、それを実際の作付けに生かすことが可能かもといった、希望のもてる情報もありました。また「フクシマ論」を書いて今売れっ子の開沼博さんはこの4月から福島大学に来るとの



田老駅前の観光センター。建物だけは残ったものの中はがらんどで、部屋には入れないように板が打ちつけられていた。



10mの防潮堤を目指して歩き始める。北リアス線で出会った女性は、大阪から家族4人で1週間の予定で東北各地を回っているとか。この日は、彼女だけが家族と分かれて沿岸部の被災地を訪ねてきたそうだ。「この目で見たものは記憶の残り方が違うから」と。



「おーい」。後ろから自転車に乗ったおじいさんが声をかけてきた。高さ10mの二重の防潮堤を越えて襲った津波は、200人も命を奪った。「田老の人間は津波を迎えにいった馬鹿者だと言われとる」。友達とカラオケで歌うのが元気の源だそうだ。緑のシートの向こうは、瓦礫の山。



防潮堤の外側↑と内側↓



潰れた自動車には移動(可)の文字が→



こと。佐藤さんに会いに「はもる」にも来たそうで、佐藤さんも期待していました。

ゲストハウス「象」泊。(佐藤さんのお子さんの一人が持っているマンションでした。)

4月1日(日)

朝から佐藤さんの運転と案内で、途中福島市で一番汚染のひどい渡利地区などをみながらやまなみ自然農園へ。佐藤さんの大きなご自宅は打ち捨てられて無残。まり英さんの線量計ではかると0.7マイクロシーベルトほどあり、みなマスクをする。福島に取材に来る記者は被ばくを避けるために同じ人は来ないとのこと。飯館村の仮設学校がすぐ近くにあり見学。

12時半福島駅前広場。佐藤さんと別れて、ここで廃炉を要請する署名活動に1時間ほど参加。私たち4名のほかに3-4名。東京電力、原子力委員会、などを刑事告訴する「福島原発訴訟団」や「福島人権宣言と損害賠償を考える会」の方たちでした。

昼食後、陶芸家で、毎日曜日駅前でメッセージを持って立っているという会田 恵さん(佐藤さんの友人)のお話をうかがう。泣いて、泣いて今は溜息という福島の人たちの気持ちや、除染の話など(柿の木一本1500円?とかの値段で、農業ができなくなった人たちが請け負ってやっているとか)。佐藤さんとはまた違った個性でほんわかと、でも芯の強い素敵な女性でした。会田さんは伊達市霊山町在住。町には20人ほどが泊まれる暖炉のある素晴らしいゲストハウスをつくった人がいて、スタートさせようとした矢先の震災。ぜひ次回はそこに泊まって会田さんの作品を見たいなと思いました。(線量はもちろん高い!!)

会田さんに駅まで送っていただいて、新幹線で帰途に。

わずか2泊3日だったけれど、被災地を自分の目で見ていろんな方の話をきくことができました。山田線(盛岡~宮古間)で四人掛けの席を譲ってくれた女性、タクシーの運転手さん、休暇村の早朝散歩ガイドさん、バスで隣に座った女性、お店の方などなど、話をしたすべての人が、ご自分は生き残ったけれど、家や、親戚や、隣人や、目に見えないものも含むさまざまなものを失って、そこにいました。

福島での運動は、とても大変そうです。会田さんが言っていた「茫然自失した果てに何かをせねばとやっと立ち上がりかけた」という言葉になぜかとてもリアリティがありました。

さて、自分に何ができるか? 今回の訪問をきっかけに考えたいと思います。(山下 史)



再開した魚市場。魚介や野菜はもちろん、惣菜や菓子、ちょっとした日用品もそろそろ。



浄土ヶ浜は、ボランティア活動によって、本来の美しい姿を取り戻していた。



2日目、休暇村の朝の散歩コースにて。庭内を案内してくれた従業員さんも、津波でご家族を亡くされたようだ。一人ひとりにストーリーがある。顔の見える支援とは何なのだろう。



宮古駅前のバス乗り場。まずこの岩手県北バスで「道の駅やまだ」まで行き、岩手県交通バスに乗り換えて「釜石駅」を目指す。



バス通りから山側を向いて撮影。遠くの方にわずかに助かった人家が見える。



JR山田線・津軽石駅。駅舎は木の板で固く閉ざされていた。鉄道再開はいつ?

30年目の宿題 ～再び訪れた東北で見たもの～

森 俊子

前文

去年3月11日。

あの震災のテレビ放送で、三陸の町々の壊滅的な映像に呆然としました。

丁度30年前。

仙台に単身赴任をしていた夫の夏休みを利用して、

岩手県宮古から宮城県多賀城までのドライブ旅行の折訪ずれた田老の、

10メートルの高さで2k延々と続く防潮堤に目を見張りました。

田老から遊覧船「陸中丸」で眺めた浄土ヶ浜を始め風光明媚の陸中海岸。

船の中で鷗や海猫に餌を投げると空中で上手にキャッチしました。

1日目は山田に泊まり、続く釜石・碓氷海岸・気仙沼から大島に渡り2泊目。

途中で食べた漁師小屋での素朴な焼帆立の美味しかったこと。思わずお代りまでしました。

大島の宿でも豊富で新鮮な海の幸を満喫しました。

翌日横浜から来た息子・娘と共に南下。鮎川泊り。

4日目は金華山に渡り、鹿と戯れ、登山は途中まで。

石巻・松島で遊び、塩釜を経て夫の宿泊先多賀城に戻りました。

次つぎと放映される馴染みある地名が、

その変わり果てた景色を増幅させました。

追い打ちを掛けるようなフクシマ原発事故。

やはり30年も前でしょうか。

故高木仁三郎氏の放射能の話聞き、その終末処理の大変さに驚きました。

東京電力曰く。「原発エネルギーは安い」は放射能が無害になるまでの

場所と時間を考えると決して安くはないと思っていた私も、

こんな事故が起きるとは考えていませんでした。

だから震災後のフクシマがいつも頭のどこかにあります。

閑話休題。

佐藤幸子さんのことは「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」代表として、またニューヨークでの活躍・日本各地での講演活動等でお名前は知っていました。

今回直接お話しできる機会を持って、佐藤さんの日々の生活や活動、福島状況を伺って、それぞれの生き方・立場の違いから「大震災被災者」とひとくくりには言えない、特殊性が、福島に住む人には重く背負わされていることを感じました。

その第一は同じ原発事故被災の福島人でも、原発事故への対応に違いがある



バスで乗り合わせた女性の家は、ここにあったという（右側黄色い家の後ろ）。命からがら逃げのびて、今は宮古の息子の会社の社宅に住んでいるが、仮住まいではストレスが溜まる一方だと言う。月に1度山田に戻って昔の友だちと話すのが、せめてものストレス解消だそうだ。



半年前と、全くといっていいほど変わっていない。「復興」の前に「復旧」なのでは？



道の駅やまだ。海岸からかなり山を登ったところにあるため、ここに津波の被害はない。しかし目の前の川は海水が逆流し、川べりの「海と鯨の博物館」はほぼ壊滅状態。



全国の商品の他に、地元の農家や海産物（写真は昨年のお嬢産物のり。ピンクのマークは地元奨学金推奨商品）も並ぶ。



乗り継ぎようにバス停が並んでいる。緑が岩手県北バス、赤が岩手県交通。（約0.07μSv）

ということ。

安易に平穏な考えや生き方に妥協してしまうのは人間の性なのでしょうか。
それとも周りを気にする・周りと同調する村社会の所為でしょうか。
それとも自分の立場（職業・地位など）の安全の為でしょうか。

同じ原発被害者の中の壁の開いていかねばならない、
沢山の困難を抱えて奮闘している佐藤さんから
私のなすべきことは何かと宿題を出された感がしました。

放射能の危険性が大きい子どもたちを疎開させることの困難さは
子どもたちが友達と離れられないことが大きいとのこと。
学校ごと・クラスごとの疎開がベターなのだが行政は動かない。
次善の策として週末疎開・夏休み疎開を考えている。
子どもたちに少しでも放射能から離れている時間を持たせたいからと。

沢山の活動をしている佐藤さんが、新たに計画をしているのが
住民の立場に立つ「診療所」作りです。
官や政におもねって安易に安全を保証する医師でなく、
住民の立場に立つ医師に診療所作り。
ほんとになんというパワーでしょう。
そして今一番欲しいものは「人手」と即座に答えられました。

翌日佐藤さんの運転で福島市内・その周辺を案内して頂きました。
佐藤さんの関わる、障害者の活動センター・看護ステーションなどをまわり、
震災前まで住んでいた川俣町の家や畑にも行きました。
ここはどの程度の避難地区に指定されてはいるのか聞きそびれましたが、
佐藤さんは放射能からの安全を慮ってお子さん3人と山形に疎開されています。

1年余り人の住まない家はもとより、丹精込めた農地の荒れ果てた様子に、
農民が農地を捨てる——どんなに悔しかったことでしょう。
と私まで胸が痛みました。

この度、始めて知ったのですが、佐藤さんは自然農法で米・野菜を作っていました。
今までの雑草を取り、耕し、肥料をやって作っていた畑や田んぼから、
自然農法に切り替え、実りある日が来るのには何年かのたゆまぬ努力があった筈です。
その農地を捨てざるを得なかったのです。

これほどの痛み・悲しみ・怒りの元凶たる原発を、
まだ容認・再稼働する政府に絶望しています。
(森 俊子)



岬の先まで、瓦礫が積まれていた。



町全体が解体現場と化している。
いつになったら元に戻れるのだろうか。

釜石駅前にて。鉄鋼の町釜石の記念碑。
碑文「ものつくりの灯を永遠に」。
下は新日本製鉄の釜石工場。被災直後から、
社員をはじめ、多くの被災者を工場内に受け入れた。



釜石は三角州になっている。駅から市の中心部へは川を渡らなければならない。甲子川（かつしがわ）には、3・11と慰霊祭のモニュメントが残されていた。

三陸、福島を訪ねて

中島まり英

三陸大津波からもう一年がたち、この間千葉さんをはじめ救援ボランティアとして現地に何度も入っている方たちがいる中、気持ちはあってもなかなか行くチャンスが作れなかった。今この目で見て自分の中の記録にとどめておかないといけない、また福島の生の話をじっくり聞きどうつながっていきけるか、そんな思いで参加した。この大災害のもたらしたもので、今のこの国、社会ありようがさらけ出されてきているのがあちこちで見られた。

風もやわらかい30日三陸鉄道田老の駅を降りた。高いホームからずっと向こうにグレーの海がみえる。駅舎は被害の後をとどめたままで放置されていた。目の前に広がるのはすべて持ち去られ土台だけがのこる寒々と荒廃の地。ここに住み逃げ切れなかった人たちを思いながら10メートルの防潮堤を目指していくとマスクをした工事の方たちがそびえるいくつもの瓦礫の山を前に打ち合わせの様子だ。ここの線量値を伺うと、「まだ計ってません。これからです。」と足元の有毒物検査機器をさして言われた。放射線も計れるのかわからないが、瓦礫にはアスベストをはじめいろいろの有毒化学物質が含まれていると後で聞き全国での瓦礫引き受けがそう簡単なことでなくこの遠大な作業にため息が出る。

今回お世話になった、「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」の代表佐藤幸子さんの川俣町の自宅は放射線量がとても高く、(持参の線量計で0.7)子ども二人と米沢に避難し週3回ほど福島の障害者施設、西からのお野菜を売るお店「はもる」はじめさまざまな活動の場まで通っているそうだ。

自宅前三方を山に囲まれたすばらしい斜面の畑は草地にしかみえない。鶏250羽も処分したと。草も、虫も野菜も大地もすべて一体となつての営みを何より大事にする自然農法で3.11まで農業をしていた。土地を棄てなければならぬ農民の怒り、痛み、奪われたものの大きさ、さらに不安はこれからもずっと続くのがやりきれない。

翌日福島駅前で「一人でもアクション」の署名活動に合流したとき、立ち止まってくれた中学生のひとは親父の作る野菜が食べられないのはおかしいともらした。子どもへの影響を心配するのは親なら当然だ。それなのに行政が進める方針は福島の人たちをますますお上不信にしていると思う。飯館村の子どもたちのため仮設校舎が川俣町に完成していた。4月からバスで通学してくるそうだ。あえて放射能が高いところへなぜ？

子どもを少しでもこの環境から逃す、佐藤さんたちは優先的に一時避難、保養に力を注いでいらっしやる。行政の対応が遅いので個々のネットワークが大事と聞き、私たちに何かできないか、今後アンテナを張っていきたいと思った。

福島県民対象の健康管理調査用紙を見ると、3.11以降いつ、どこに、



町のあちこちで解体作業に遭遇した。中には、家人が帰ってこないのか、まだ手つかずのままになっている家も。手を合わせながらシャッターを切った。



市内の2か所で商店街が復活していた。プレハブ造りで以前とは比べ物にもならないというが、少しずつでも復活の兆しがみられるのは嬉しい。



商店街のCATVの生中継と偶然出くわした。大分と被災地をつなぐ特別番組で、雨の中、地元の伝統舞踊を披露していた。



東北電力釜石支社。3階まで浸水したのか、入口だけでなく3階窓も封鎖されていた。



釜石駅前のポスト。鉄と鮭が釜石のシンボルだった。

どれ位、どんな建造物にいたか、また何を食し、飲んだか、数ページ詳細に書きこむのだが、肝心の健康状態については何の設問もなく書き込むスペースもない。データのためのデータだったのか、モルモットなのか、県民のいらだちに追い討ちを懸けるようなものだ。

うれしい再会もあった。3.11 郡山集会のとき分科会で出会った A さん。恐怖に迷い悩む毎日、避難させる子どもとの悲しい別れ、仕事もなにも手につかず落ち込むばかりの日々だったと初めてうかがうことばかりだった。でもこれではいかん、と今年なって、手書きのメッセージ板をにかけて、毎週日曜日福島駅にたっている。仕事の陶芸も少しずつ始めていると伺いほっとさせられた。「こんなに自由にしゃべるのは久しぶり。」と言われたときの笑顔はとても素敵だった。

佐藤さんの会を出しているたよりは「たんがら」、ネーミングは彼女たちの運動に思いいれ深くかかわっているロンドンにいる留学生、彼はその編集者だ。「たんがら」とは畑に行くときに背負うしょいかごのこと、若者の発想に驚き未来が明るく見えてくる。「福島の間人は、ずっと原発という「たんがら」をしょっていかねばならないのよ。」彼女の言葉を私たち全員のものにしないとイケない、これからこの国がどっちに向かっているのか、はたして変わるのか、変えられるのか、力寄せ合い出発点にしくはなくてはと感じた。

(中島まり英)



↑福島の野菜カフェ「はもる」店内。
↓放射能についての各種情報や、全国の汚染されていない安全な食品が並ぶ。



(福島駅前：0.54μSv
はもる店内：約0.07μSv)



ゲストハウス「象(しょう)」があるマンションロビーには、日々の放射線量が掲示されていた。



川俣町の佐藤さんの自宅を訪ねる。少し車で走れば飯館村、浪江町に。



佐藤さんは代々伝わる農家で、研修生を受け入れて自然農法の学校などもしていた。
(0.75μSv)

1年たっても変わっていない

千葉智恵子

3月末から2泊3日で、岩手～福島へ駆け足で東北被災地を訪問してきた。昨年5月のGW、7月に福島県相馬市、宮城県東松島市と2度のボランティア活動に参加。そして3度目に、11月、勤務先の会社が主催したボランティアツアーで、岩手県宮古市・釜石市へ行っている。このため今回で被災地訪問は4回目、震災以前にも遠野や三陸海岸は訪れているので、東北訪問自体は5回目となる。少しだけ昨年の訪問に触れたい。1度目の訪問はやはりショックだったし、それが今回の訪問の遠因でもあるので。

震災2か月後とはいえ仙台はさすがの東北一の大都市だけあって、すでに新幹線のホーム・改札に震災の痕はなく、市内も、地震の被害が比較的少なかったこともあるが、ガス灯の不具合やビルの空き部屋がやや目立つ(震災の影響かどうか?)程度で拍子抜けするくらいだった。しかし、沿岸部へ通じる電車はどこも復旧しておらず、相馬へはJR常磐線で亘理駅まで行き、そこから代替バスに乗り換えて向かった。車窓の景色は、市街地から田園風景へ。亘理からは緩やかな山道を進んだ。20分ほど進んだあたりから、ぽつぽつと屋根にブルーシートがかかった家や、小さな崖崩れが見え始めた。途中で、山元町役所前の災害対策本部の臨時バス停に停まり、屋外に出された受け付けの長テーブルや応援メッセージの寄せ書きや迷彩色の自衛隊車両を見

た時は、とうとう「被災地」に来たと思った。やがて山道から海岸沿いの浜通りに出た。

新緑の景色から一遍、目の前が真っ黒に染まった。市街地から一段高いところに作られた道路のすぐ下から、遠く数キロ先の海岸まで一目で見渡せ、湿ったどす黒い土砂が一面を覆い尽くしていた。建物の影がかるうじていくつか、そして数メートルの高さに積まれた瓦礫の山が1つ、2つ、……。

全国の社会福祉協議会がボランティアセンターに職員を派遣されてきており、ボランティアに仕事を振り分ける。仕事は千差万別で、瓦礫の運び出しは一部業者が始めていたが、半壊家の土砂の掻き出し、清掃、側溝の泥出し、避難所の援助物資仕分けや、買い物、介助、写真や遺品の洗浄。いっしょにボランティアをしていたメンバーから聞いた話によると、陸前高田ではボランティアの高校生にまで遺体の運び出しをお願いしていたそうだ。私自身は写真の洗浄を担当したが、うず高く積まれたヘドロ化した土砂にまみれた写真とあの「臭い」は忘れることができない。

そしてほぼ半年後になる3度目の訪問は、妊産婦と小さい子どもを持つ母親のケアを目的としたイベントの手伝いに岩手県宮古市・釜石市へ。日程の関係で大槌町の河原の洗浄作業をするチームとは違い屋内での活動だったが、会場と宿舎の移動で三陸海岸沿いを通った際に、半年前に見た「何もない大地」が何度もフラッシュバックした。別れ際に、現地のバスの運転手さんや宿舎先、お店の人たちの口から出た「忘れられるのが怖い。支援してくれるつもりなら、一度限りでなくまた来てほしい」。そして、「お金も使ってほしい」という言葉。実は、その言葉と、少しずつでも復興していることを確かめたくて持ちかけたのが今回の企画だった。そのため、コースは3度目とほぼ同じルートを辿ることに決め、コンセプトは「見て、感じて、考える。そして金も使う」に。女ばかりの4人旅。年齢は40代~80代の「250歳超高齢」ツアーと相成った。

道がわからないので車での移動はやめ、公共交通機関を使うことに決めた。まだ三陸鉄道が途中までしか動いていないこともあって、1日目は盛岡→宮古→田老(北リアス線、4月1日から全面開通)と移動・北上し、宮古に戻って一泊。2日目は宮古からバスを乗り継いで釜石まで行くことにした。

3月末の盛岡は、まだ雪が残る冬景色の中。電車が三陸海岸に近づくにつれ、徐々に雪が消え、枝先に芽吹きが感じられるようになった。気持ちは、冬から春へ。目的地は被災地だとわかっていても、どこか浮き浮きした気持ちで、宮古駅から三陸鉄道・北リアス線に乗り換えた。車内には「がんばれ北リアス線」の言葉と子どもたちのイラストが所狭しと貼られ、「復興」という言葉が心に浮かぶ。だが、そんな浮ついた気持ちもそこまでだった。

田老へは今回が初めて。ホームに降り立つと、遠く水平線までがまっすぐに見渡せた。入り組んだ海岸線からは一歩内側に作られた鉄道は高架になっており、眼下に町を見下ろす作りになっている。しかし、向こうまで見渡せる理由はそれではない。デジャヴ感に襲われる。目に映ったのは海岸まで続く真っ白く平らな台地、そして2本の元防潮堤だった。

ひとまず、数十年前に田老に来たことがあるという森さんの話を元に、防



奥に見える鶏舎では250羽の鶏が飼われていたが、すべてダメになったようだ。



農地は何の手入れもできないまま放置せざるをえない。



猫の世話をしに週に一度は帰宅しているというが、この猫たちの健康は大丈夫なのだろうか？



川俣町には、計画的避難区域に指定されている飯館村から非難した子どもたちが通う仮設小学校がある。3つの学校が1か所に集められている。(校門前: 0.54 μSv)



潮堤を目指して歩くことにした。北リアス線内で会った、大阪から来ているという女性も一緒に歩くことに。大阪からは家族で来ているが、今日は彼女だけが別行動でここまでやってきたという。書店で働いているそうで、ときどき自分たちに何かできないだろうかと同僚と話すことがあるという。「なぜ、わざわざ別行動までとって田老に？」との問いには、「自分の目で見たものは記憶の残り方が違うと思うから」と。

途中で、自転車に乗った老人が後ろから声をかけてきた。しばらく話しながら歩く。老人の話では、田老町はこれまでに明治、昭和と2回大津波を経験していた。その経験から生まれた10mの二重の防潮堤が自慢で、最初に「3mの津波が来た」というアナウンスが流れたときは何人もの人が疑うことなく防潮堤まで津波を見に行き、そのまま帰ってこなかったのだそうだ。「他の町の人には、田老の人間は津波を迎えに行った大莫迦者だと言われとる」。「ご家族は？」と尋ねると、「大丈夫だった」と言っていたが、話を重ねるうちに、実は20年前に奥様を亡くして以来ずっと一人で暮らしてきたと教えてくれた。「村の人は少なくなったけど、ときどきいっしょにカラオケで歌うのが元気の素だ」とも。最後に「ここは、暗くなるとお化けが出るから早く帰んな」と冗談めかして去っていった。

ところどころ崩れかけた防潮堤から眺めた景色は、緑色のシートの向こうに積まれた「第3の瓦礫の防潮堤」と船のない港だけだった。

宮古に戻り、復活した市場に寄って「土産」物を買ひ、宿舎（休暇村・陸中宮古）を目指した。向かう途中で、浄土ヶ浜に立ち寄った。浜辺周辺の瓦礫の類はすっかり片付けられ、目の前の海は凪いでいて正に浄土。聞けば、ボランティアに来た人が最初に希望するのが浄土ヶ浜で、この辺りでは最初にきれいになったのだそうだ。

実は半年前に宿泊したのが、この浄土ヶ浜にあるホテルだった。当時はまだ経営再開する前だったのを頼み込んで泊めてもらったらしい。ホテルの支配人から聞いた、震災当日ホテルロビーの窓から波が盛り上がりて来るのが見えたこと。震災直後から3か月間、町の被災者を迎え入れ、ホテルの従業員一被災者の垣根を越えて共同生活を送った日々のこと（当然、従業員たちも被災者だ）。その後は警察関係者を受け入れ、事業をつぶさない努力を続けたこと。それが実って今年からはようやく経営再開を果たせそうなこと。そんな話を思い出しながら、美しくよみがえった浜を眺めていた。

2日目は、電車が復旧していないため、代行バスを乗り継いで宮古～釜石間を南下した。先にも触れたとおり、この日は私が前回通ったコースをほぼそのまま辿った。釜石までの直通バスはないため、朝9時に宮古駅を出発し、道の駅やまだで乗換えて、釜石には午後1時過ぎに到着する。電車さえあれば1時間もいない距離が3時間半もかかる。これだけでも小旅行。

前日のことがあるので、「それほど大きな復旧は期待しない方がいい」。そう思う反面、「浄土ヶ浜の例もあるし、田老は小さな町だったからで、もう半年も経っているし、あれほど連日のように報道されボランティアも入っているはずだから、……」。そんな淡い期待は、当然のごとく、打ち砕かれる。



佐藤さんの子どもたちが卒業した、従来の小学校。来る高齢化を見据えてゆくゆくは老人ホームになる予定でデザインされているらしい。



校庭に設置されたモニタリングポスト。徹底的な除染作業後に設置されたというが、それでも値は……。(0.211 μ Sv)



駐車場に設置された線量計。以前はケースがなく計測値が見られたそうだが、いまは嚴重に鍵が掛けられている。

車窓を流れる風景は、山の色が紅葉から裸木に、海の色が秋の濃紺から春の波に変わっていただけ。ところどころ新築の家が見られるものの、半年前とほぼ同じ、白くただっ広い景色が目の前を通り過ぎていった。

それでも目の間を通り過ぎる海は穏やかで、「こんなにきれいな海なのにね」とつい言葉が漏れる。と、それを聞くとがめた地元の方から「あなた達はそう言うけど、その言葉を聞くと私はどんな悪いことをしたんだろうと悲しくなる」という言葉が返ってきた。たとえ建物や外見が復興したかに見えても、深く傷ついた心が癒えるには、あとどのぐらいの年月が必要なのだろうか。前回ここを訪れた際も仲間から「震災を観光にするのはどうかと思う」という意見があった。だからむやみに物見遊山気分で訪れるなど。しかし、このまま日常生活に戻って、いつの間にか震災を忘れてはならない。まだ震災は終わっていないと言い続けなければ。心の中で手を合わせながら、何度も携帯の写真ボタンを押した。

とはいえ、宮古や釜石の駅前も昔のようにきれいになっていたし、再開した魚市場のおばちゃんや仮設商店街の人たちは明るく前向きに頑張っていた。確実に、明日に向かって歩き出していた。時間はかかるだろうが、必ず元のように再生する日が来るに違いない。

釜石から先は、遠野・新花巻経由、新幹線で福島に南下した。「子どもたちを放射能から守る会」の代表佐藤幸子さんを訪ね、一泊。翌日に福島市内を案内してもらう。福島でのことは、もうみなさんが詳しく書いているので、いまさら私が付け足すことはほとんどない。

この人たちは、津波や地震などの目に見える被害はほとんどない代り、目でも鼻や舌でも感じるできない恐怖と闘っていた。チェルノブイリ原発事故では、26年が過ぎた今でも人が近づけない「ZONE」が残っているのだ。「国破れて山河もない」といったら身もふたもないが、原発事故は、一度起こってしまったら、国も人も山河も飲み込んでしまう。

「1年たっても何も変わっていない」これが正直な感想だ。日本人は「七十五日」で忘れるのが得意だけれど、「石の上にも三年」という言葉も持っている。とにかく、忘れずに息の長い支援を続けること。長く続けるためには、極端な無理をしないこと。そして、「他人ごと」も「我ごと」のように感じる感性と想像力を磨くこと。これが私の課題だと改めて思った。

(千葉智恵子)

附記

今回の訪問で、当基金より福島「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」へ10,000円のカンパを贈呈しました。



安達太良山をバックに。佐藤さんと。



福島駅前。一人アクションをしている会田さんと。

3年ぶりの基金通信です。「節電」を叫ぶ一方で、遅ればせながら「基金通信」も電子化の方向へ舵を切りました。

3月11日以降茫然自失の状態だったのは、実は、自分自身だったのではと試してみたり、やはり見たものを伝えることこそ草の根の精神だと奮い立たせてみたり。基金通信は不定期発行ですが、自分たちの身の丈に合った、そして現地のニーズに沿った活動を細く長く続けられればと考えています。今後とも、ご指導ご鞭撻いただけますよう、よろしくお願いいたします。(C)